

ドイツ文芸学方法論考 I

関 徹 雄

ドイツ文芸学はロマン派に由来する。19世紀後半以後文芸学は幾多の展開、変遷を経てきたとはいえ、根本においては不変の世界観的性格が常に支配する。つまり非合理主義的ないし観念的な性格である。このような性格は概してロマン派理論においてはじめて体系化への試みがなされた。だが、この理論の性格的類似性をもって文芸学の根源をロマン派に求めるとすれば文芸学の歴史はロマン派理論の受売りの受容乃至先行諸論の修正を示すにとどまるであろう。したがってロマン派から文芸学諸論にいたる理論の観念的共通性よりも、この理論を歴史的形成物として把えうる歴史的類型の共通性が求められねばならない。

すなわち市民社会的精神の崩壊現象である。

「市民的思想の最後の進歩的時期の一つ、その最後の精神革命の一つはまさしくゲーテ時代のドイツでおこっていた。*」G. Lukács: Goethe und seine Zeit; in: Vorwort S. 9.) とか、ゲーテ像を問題としながら論を進めるが文芸学の歴史について、「ドイツの幾世代に亘る大学教授から知られるものは市民社会の崩壊、市民社会的自己意識の崩壊が何であるかということである。」(P. Rilla: Goethe in der Literaturgeschichte S. 12) という発言から「ゲーテ時代——ロマン派への移向」と「近代文芸学」に共通する歴史的類型の存することがわかる。

* この論はルカーチが多くの文学史記述に反して、ドイツ啓蒙主義に市民的思想発展の過程の源をみて、シュトルム・ウント・ドラングを経てドイツ古典主義にこの過程の最後最大の結実を見たという意味である。(Vgl. G. Lukács: a. a. O. S. 10 f.)

この崩壊現象はロマン派において、「自我の高揚・拡張」といわれ、近代文

芸学においては、「詩人像ないし人間像の扱え方」に見られよう。

以上において、ドイツ精神史乃至文芸学の歴史に歴史的・理論的共通性の存在を指摘したが、このことについて問題は三箇に分たれる。この三箇の問題にすべて触れるとすれば、ドイツ古典主義より近代にいたる精神科学の概要にわたらねばならぬ。したがって以下取扱う問題は最後の点である。

近代文芸学はロマン派科学の遺産をいわば直接にうけついで実証主義らしい、常に新しい人間像を設定してきた。この人間像の変遷が歴史のゆがみであり、市民的自己意識の崩壊の展開現象なのである。一般に実証主義の人間像は歴史主義の因果性、相対性によるものである。だが、デュルタイ及び彼の理論を承けたその後の文芸学の流派は、前流派の設定した人間像観を“Entmenslichung”とみなし、人間像の解放、さらに新しい人間像の創造を策した。このことは理論的には形而上学の復活である。形而上学への志向意識は歴史学派の支配する時代にあつては、はなはだ口幅つたい現象であつたが、19世紀末から20世紀初頭において却つて逆に誇になつたのである。つまりこれが歴史のゆがみであり、これにより人間像は狂つたところに設定されたのだ。かゝる人間像には当然、注意再見の必要があろう。ことに、この間の歴史的推移に焦点をおいて、文芸学方法論をみれば——近代文芸学が対象になるにせよ——、問題は更に限定される。したがって以下この問題を満足させるために取扱わねばならぬ対象はデュルタイをはじめとするグンドルフの周辺とみなせよう。

(I)

実証主義、ことにシェーラー学派の大きな功績は「遺産、習得、経験」(Erebttes, Erlerntes, Erlebtes) という方法論的図式に、さらに歴史的状況をも適当に顧慮したことであつた。だが、この方法論的図式は純粹に文学的影響関係を図式的に規則づけたただけであつた。つまり、悪くいえば文献から文献が出てきて、これに詩人の伝記が逸話めいた骨組を作るときのものである。したがって歴史的要素は当時の社会的なり(政治的、さらに文学的主潮とは何等関係しない。この場合の歴史的とはホーエンツォレルン家の要請からでた最も単

純な史料編纂か、あるいは上流階級にぞくする教養俗物 (Bildungsphilister) を満足させる程度のものである。このような観点で取扱われ、このような観点が最もよくあらわれている対象はゲーテ像である。^{*}

* ドイツ文芸学の歴史をみれば、主対象は常にゲーテにおかれる。つまりゲーテ像の多様な変遷をたどればドイツ文芸学の歴史を語れるといつてさしつかえない。つぎのようなすぐれた論文がある。

R. Buchwald : Goethezeit und Gegenwart 1949.

R. Unger : Wandlungen der literarischen Goethebildes seit Hundertjahren,
in : Aufsätze. Bd. II 1929.

P. Rilla : Goethe in der Literaturgeschichte 1950.

当時の文芸学的ゲーテ研究として、シェーラー, R. M. マイヤー, ビール
ショフスキーのものがあるが,^{*}

* W. Scherer : Goethe-Aufsätze 1886, Aus Goethes Frühzeit 1879.

R. M. Meyer : Goethe (Geisteshelden) 3 Bde. 1894.

A. Bielschowsky : Goethe, sein Leben u. seine Werke 2 Bde. 1895—1903.

ウンゲルはビールショフスキーについて次のように述べる。「R. M. マイ
ヤーのゲーテ論は、多くの版を重ねたにもかかわらず、ドイツ家庭必備の書と
して、ルイスの古めかしい著書^{*}

* G. Lewes : Life and Work of Goethe, Bde. 2. 1856 (1903年までに13版)

に代れなかつた。5人ないし6人の競争者のなかでこの名誉をすばやく無条件にえたのは、ほとんど同時に出版されたA. ビールショフスキーの二巻本であつた。この書は今日まで4分の1世紀を通じて、この名誉をえている。何によつてであろう。形においてすぐれ、好ましい文才があり、意気高いものであるが、ごく自然なスタイルを持ち、繊細な内容分析に富み、(少くとも著者自身の完結した第一巻)各部が巧妙に均斉がとれていることなどからみて——この作品の精神にドイツの読者層が何らかの親近感をえたからにちがいない。ビールショフスキーの序文には、『ゲーテの場合、彼の生のデテイルは我々に人間像だけではなく、詩人像をも開陳しているのだ』と述べられている。私の見解

が正しいなら、このような見方に穏当、巧妙に昇華された心理学主義があつて、これが1895年から1910年にいたる時代精神に共感をもたらした、この書に成功をもたらしたのである。したがつてこの精神的立場は、未推敲の題材でセンセーショナルな伝記主義に墮している E. エンゲルの「切り貼りあわせゲーテ論」^{*}を、1909年になおドイツ教養俗物 (Bildungsphilister) の愛読書たらしめていた立場と本質において変りない。実際、最近の半世紀来、ドイツの文学的現代趣味の高化発展について語れるであろうか。ルーイスの小手先で外面的な英雄像に代つてビールショフスキーの個人的愛情から観られたゲーテ像が登場したり、我々の最大の人物に常識論 (Communis opinio) を反映させんとするときエンゲルという愚鈍な末梢主義者が登場する時に。」 (R. Unger : a. a. O. S. 225—226)

* E. Engel : Goethe 1909.

このような慨嘆の批評がむけられる人間像—ゲーテ像の把え方に市民的自己意識が介入する余地があるだろうか。

だが、「文芸学は歴史主義的思考の影で長年安閑と過してきたが、数年来この純粹な歴史的思考法から逃れ、独自の方法と独自の対象を有する文芸の学たらんと努めている。」 (W. Muschg : Dichtertypen, in : Weltliteratur Festgabe für F. Strich, S. 67) とか、「伝記学の新しい意味をえんための近代文芸学の闘争は人間存在の新しい意味をえんための闘争のあらわれである。」 (W. Muschg : Dichterporträt, in : Die Philosophie der Literaturwissenschaft, S. 313.) という指摘のある人間像の根本的可能性に関する問題を実証主義との絶えざる Antagonismus の場に設定したディルタイ、グンドルフ等の新しい文芸学にも緒言で既述せるように、市民社会的精神の崩壊現象がこゝでもあらわれているのだ。つまり、こゝでは形が變つてあらわれているのにすぎないのである。

「シェーラー学派に欠けているのは創造的人間の有するデーモン (Dämon) にたいする見解である。人間の魂の背景と深遠にたいする洞察と、創造性

(Originalität) という真の品位にたいする感情が欠けているのだ。」(W. Mahrholz : Literaturgeschichte und Literaturwissenschaft) と示されるような見解を旗印として、新理想主義にならい、形而上学復活をもととして、人間像——ゲーテ像の改変が企てられたのだ。一面で新しい精神性の創始者となり、他面でゲーテの精神的形姿 (Gestalt) を新しい手段で描こうとしたのだ。(Vgl. Buchwald : a. a. O. S. 300) このような動向は歴史の因果性、相対性を絶縁し、創造的個性を重視するから、こゝで作られた人間像は形而学的性格を帯び、究極に於いて永遠の全相象徴的人間概念として設定される。こゝでは歴史もあらゆる時代に通ずる「全体的精神活動」にまで概念化され、これを象徴する人間像——英雄像が設定されたのである。^{*}

* 歴史概念の永遠化は既に W. ヴォリンガーにおいてなされた。(W. Worringer : Abstraktion und Einfühlung. 1908.)

この代表像としてゲーテ像がとりあげられ、創造的人間 (der schöpferische Mensch) の精神活動の内的発展の“Synthese”, したがって超個人的、超歴史的必然性を有する典型として啓示されたのである。このような傾向の先鞭はディルタイ、ニーチェの反歴史的生の哲学、さらに伝統の理想主義に、その再興という意味でつながるグンドルフである。^{*}

* F. Gundolf : Goethe 1916 (12 Aufl. 1925)

彼は純粹に文学的要因より導出した形姿 (Gestalt) の必然性、象徴的普遍性を強調することで、記念碑的人物、英雄像——デーモンを設立した。さらにグンドルフはこの像に専心して、これを Mythos として明示することで歴史の問題を超越する。(Vgl. M. Wehrli : Allgemeine Literaturwissenschaft S. 15) したがって、この創造的個性の秘密を探るように書かれた記念碑的伝記学では作品と詩人が一個の不可分離の形態をとつてくる。これにもとづいて書かれたグンドルフのゲーテ論は当時破天荒な現象となつた。前流派伝記主義の必要条件としての個性は、偶発遺伝 (Zufällige Vererbung) によつて生れ、その後環境によつて形成されるとみられたのであり、この種の自然科学的因果的

考察が文芸学にも支配していたからである。

これに反してグンドルフは、——ゲーテをあてこんで——文芸創造をなす生からは個々の瞬間に、そのそれぞれの特殊性に応じて具現・描出されねばならぬ偉大な性格が生ずるといった主張^{*}をなす。

* 以下「文芸創造をなす」という意味にて「創造的」なる語を用いる。

この点に関して、ゲーテが唯一、典型的に何であつたか、何をなしたか、ということがグンドルフの重要事なのである。グンドルフにとってこの創造的人間の存在とは一個の人間内での存続と発展である。常在する中心から存在は拡大し、次第に大きい円を形成する。したがって、この中心なるものが、先天性もしくは個性のイデーなのである。このようなグンドルフの根本観は次のように述べられている。「偉大なる自然から美しき文化（教養…… Bildung）になる、これがゲーテの本能であり、彼の意識的な努力であり、やがては彼の事業であつた。彼のシュトゥルム・ウント・ドゥラングの一見甚だ無意識的な爆発のうちに、彼が狂乱のさなかに投げすて、あるいはたわむれに落したすべてのもののうちに、彼の醜酔する暗鬱そのもののうちにすら、既にあの造形家衝動が、排除あるいは集中によつて一層形姿的に一層純粹になろうとするあの意志が、はたらいているということ、このことが彼の天才性よりも一層多く彼をシュトゥルム・ウント・ドゥラングの詩人達から区別する。現在あるいは将来、間接にあるいは直接に、積極的にあるいは消極的に、彼の自己形成に役立つことのないような行、形姿ではなく、あるいはそれを追求しないような行は、一行もゲーテには存在しない。ゲーテ即形姿家的ドイツ人というこの概念、その下に私が彼の全創作を納めることができるであろう唯一の概念、私には彼の活動のすべての側面に適用しうるように思われる唯一の概念をもつて、この予見をもつて、私は彼の実存の諸発表を数群に分類し、それと同時にそれらの群に、それらがゲーテの生の証拠として、彼の形姿の表出の手段として、我々にとって持ちうる意味を指定してみよう。」(F. Gundolf : a. a. O. 小口優訳「若きゲーテ」未来社版S. 15—16)

このように新しい人間像形成という意図のもとで、先天性、創造的個性、ないし“デーモン”(ゲーテ自身の言葉)が開陳されるが、グンドルフ理論の性格規定のために、マールホルツの見解を引いておこう。「グンドルフの敘述を支配するのは、年代記とか、時間的随伴現象を取扱うといったものでなく、ゲーテという創造的諸力の統一内で、いわば諸々のカテゴリーとか、種々独得の範圍とに完成される創造的先天性が、漸層的に、ときに間歇的、またときに急激に展開するという要因である。伝記学の新しいタイプである記念碑的形姿の展開は、価値あるもの、絶対的なもの、永遠に妥当するものを求めんとする意欲である英雄的生の哲学にもとづいて、カテゴリー形成の方法論を媒介にして創造されたのであるが、この新しいタイプはグンドルフの著作でも他のゲオルゲ派の同人たちと同じようにあらわれる精神史を開陳しながら自分等の相貌を規定するものである。」(W. Mahrholz : a. a. O. s. 117—s. 118)

* M. Kommerell : Der Dichter als Führer in der deutschen Klassik 1928.

: Jugend ohne Goethe 1931.

P. Hankamer : Spiel der Mächte 1938.

だが、こゝにグンドルフのゲーテ像の長短が意味されている。前にも述べたがグンドルフは偉大な創造的生からは個々の瞬間それぞれの特殊性に応じて、偉大な性格が生ずるとみた。ゲーテは自己を「エンテレヒー」(“Entelechie”)とも、「モナデ」(“Monade”)とも、「不死なるもの」(フアウスト完成後)とも、「デーモン」ともみて、こうあるべき宿命的使命が、従前の法則にしたがつて生きながらも、自己を発展させるものとみていたのである。したがって、グンドルフがゲーテという存在を創造的神的生活の啓示である自然現象とみなし、ゲーテの業績を生きた全相的形姿(Gestalt)への意識的形態化として描いているのは理論的に正しい。だが、グンドルフのテーゼに述べられているとおり、ゲーテ以外にこのような形成過程をとる詩人は存在したことがない。したがって、グンドルフという形で、ゲーテという偉大な形姿へと形態化される自然の一回的現象が枠づけされたのだともいえよう。^{*}

* グンドルフの他の伝記学がゲーテほどすぐれていないのはこのことにもよろう。

こゝに前記のマールホルツの結末のような問題が存する。ゲオルゲ派の祖、シュテファン・ゲオルゲはマラルメやヴェルレーヌと交際があり、20世紀前半のドイツ詩壇における最も個性的人物であつた。ゲオルゲも、もちろん実証主義により歪曲されていた人間の問題（ことにゲーテ）に再び注目したが、ゲオルゲの場合、自分の心を最も強くうったゲーテの性格、ことに詩作に必要な優雅さとか、機智の規範を考えていたのである。つまり、个性的独創的詩作の支えとしてゲーテを利用したまでだつた。このように、強く自主性を尊重し、自立を求める意欲はグンドルフはじめゲオルグ派に受つがれた。グンドルフ等はゲオルゲのすゝめたゲーテの著作に通じることで、却つてゲオルゲを離れた。当時も君臨していたゲーテの威光を自己の自立に利そうという意欲はグンドルフに最も強くあらわれている。理想主義復活による新しい人間像形成とともにあらわれたこの意欲の結晶が彼のゲーテ像であるといつてよいのだ。「彼（グンドルフ）はゲーテ的存在の理念を語り、このウル・ゲーテ（Ur-Goethe）の変容が眼前に完成されるかのように、自分の生を描いている。」（R. Buchwald: a. a. O. S. 312）という考察も可能なわけである。したがつて、指摘したように、理論的には体系の態をととのえているようにみえても、グンドルフがゲーテの存在の神祕的根源とか、デーモンのゲーテ本来の歴史的意味を受継いでいるであらうか。^{*}

* グンドルフが前代の学問に何によつて新風をふきこもうとしたかについて、M. Weber., E. Gothein 等が徹底的に批判的論議をかわした。グンドルフと思考形式の類似するベルトラムさへ、最も偏狭な“Die Versuch einer Mythologie”たる書とみなし、こゝで描かれているのは「生」ではなくて、ゲーテ周辺の「伝説」にすぎぬとみている。

だいたい、ゲーテには形而上的思考がぬけている。自然が概念だからである。^{*}

* 1794年のシラーとの最初の出会ひの対話を思出せばよい。

かくて、グンドルフも形而上学復活という時代転機に生れ、“Bildung”（教養）を“Geschmack”（趣味）に傾斜させてゆく教養俗物であり、こゝでも市

民社会的意識の崩壊がみられるのである。

(II)

次に「教養俗物」(Bildungsphilister)——「市民社会的意識の崩壊」の歴史的意味を述べねばならない。教養 (Bildung) 概念はルネッサンス以来のものであるが、ドイツでは W. Humboldt の理論^{*}、および

* W. Humboldt : Homboldt Anthropologie und Bildungslehre, herausg. von. A. Flitner 1956., darin besonders : Theorie der Bildung des Menschen 1793, Über den Geist der Menschheit 1797.

ゲーテの教養小説 (Bildungsroman……“Wilhelm Meister”) 以来有名である。古典主義では全人間像 (“Ganzer Mensch”) とか、全相普遍的人間 (“Allgemeinmenschlichkeit”) の形成を求め、これに倫理的意味を現実的歴史的関心のもとで与えるのが一般に “Bildung” (教養) といわれる。

* 他の国では人間の形成は「知識」といえよう。

だが、ドイツではこうした理念が、「精神的形象」としてたどらざるをえなかつた。

* ドイツの非合理主義の伝統はこゝに存する。

19世紀末から20世紀20年代頃にかけて、こうした古典主義以来の人間像を再編成し、精神的形象としてばかりでなく、具象的「形姿」(Gestalt) として形成せんとする意識が生じたことは既に幾度か触れた。このことは人間性喪失の恢復の基礎として、古典主義において概念構成された普遍性を求めたともいえる。だが、この普遍性を求め損つてしまったのである。この場合も Bildung を人間像の形成要素として設定しているのだから、普遍性がなければ、Bildung (教養) は Geschmack (趣味——日本の伝統的様式概念でいえば“風流”といえよう。) への過程をたどり、現実を逃避せざるをえなくなる。こゝでは現実と生との関係は不純になる。このような関係のもとで登場してくる人間が Bildungspihlister (教養俗物) という人間類型である。

* 市民社会的意識の崩壊の時に於いて必然的に生れるもので「俗物」という悪い語呂からひゞく否定的意味はない。むしろ、当時として社会的に意義のある人間類型でさへある。歴史的社会的必然性よりする人間の下落現象を歴史的に類型化した良著に、W. Muschg : Tragische Literatur Geschichte 2. Aufl. 1953. がある。

この類型像は記念碑的ゲーテ像、英雄的ゲーテ像を求めたグンドルフにもあてはまる。既述せるように、グンドルフは普遍性をいつのまにか自己充填の具に代えてしまい、ゲーテ的世界のあらゆる合理的実体的規定を無に帰し、精神的でも、歴史的でも、社会的でもない主観的規定を設定しているからである。ことに教養体験“Bildungserlebnis”ゲーテを取出す際)このような人間類型にぞくすグンドルフ等を指して、次のような見解もある。「形而上学的なものの有する現実性の意味がドイツ人から失われ、生の不安が権力というデーモンに逃避させた。」(H. Srbik : Geist und Geschichte Bd. 2. S. 246)

* 古典主義ではこの意味があつた。

つまりこのことは歴史的にも理論的にも不安だから、どこかで自己を補償せざるをえないという意味であり、こゝにおいても既に市民社会的意識の失墜がみられよう。「自我の補償のゆきすぎ」はドイツ精神史上ロマン派以来のものであるからである。

では、このような要因が、ことにグンドルフの場合、どのようにあらわれていようか。「シェーラー学派には歴史的に自明なことがらが少しではなく、多すぎるほどであつたので、こんどは背景 (Hintergründe) が問題になつたのだ。物質的關係がありすぎたから、今度は奥底 (Abgründe) が問題になつたのだ。肉体が問題になりすぎたから、今度はデーモンが問題になつたのだ。これはいつた何が起つたことなのだろう。起つたのは、ほかでもない市民社会の崩壊がブルジョア的精神状態を設定したということだ。」(P. Rilla : a. a. O. S. 27) と、指摘されるような事情からグンドルフ——ゲーテ像は生れてきている。同時にこの指摘はグンドルフにとゞまらず、実証主義から“Dämon”——“Mythos” 形成へと進む時代主潮をも示している。つまり、この移行はロマ

ン派以来の諸科学の進歩を体感してきた市民が、いわゆる“教養”ゆえに実証主義の素材学、伝記学に尊敬の念を起せなくなつたことである。

* この進歩とは、古典主義の支えの喪失を意味する。すなわち歴史性のない進歩である。(本稿緒論前半を参照)

このような市民に尊敬、畏怖の念を喚起するものは、精神的にも物質的にも制約を許さない非合理性に根ざすパトスである。このパトスの信管の役割をしたのがグンドルフのゲーテ論である。すでに歴史性を失っていた教養市民(Bildungsbürgertum)が古典主義に注目することで、自分の足場をもう一度固めようという意欲があつたからである。つまり、美学的問題の場を構築しようとしたのだ。だが、歴史性の喪失とは古典主義的普遍性の喪失である。

* グンドルフのでなく、真のゲーテの創造と行為を見出せば、このことは明白になる。

古典主義的普遍性の喪失は古典主義的人間——生の問題の喪失である。シラー、ゲーテの美学論は歴史性と人間性との密接な関聯のもとで設定されていた。

* Vgl. G. Lmkács : Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe S. 106—7, binzu Vgl. Schillers Theorie der modernen Literatur S. 89., in : Goethe und Seine Zeit 1953. このことがルカーチの古典主義評価の根本的基礎となつている。以上の外、多々述べられている。

したがって、教養市民の美学的問題は生との不純なつながりにおいて設定されたといえる。(“Geschmack”から“Ästhetizismus”なる学問性へと進む)教養市民はグンドルフの著を「教養家庭必備の書」となすことで、生とのつながりを持つたのだ。グンドルフのゲーテ論は1916年第一次大戦中に出版されて、以後12版重ねたほどであるが、このような生との不純なつながり、非合理論的性格、反歴史性については、以下のルカーチの論をみても明白であろう。

「生関係、およびその認識機関である予言的直覚とに存する非合理主義の宣伝は、形式的に見ればディルタイ自身にあつてはまだ実質的に穏当であつた

が、この宣伝が早くも戦前において発揮されるディルタイの大きな影響の基礎となつていのである。われわれはまずゲオルゲ派の活動、ことにその文学史のおよび美学的活動を指摘（すれば、）……この学派の精神的指導者であるグンドルフにとっては、“説明”と“了解”の分離ではもはや満足できない。彼は体験の内部にも“原体験”と“教養体験”との区別をたてるが、ここでは直覚説の反歴史的、反社会的性格がディルタイ自身におけるよりも、……はるかに徹底して表現されている。」(G. Lukács: Die Zerstörung der Vernunft S. 340. 1955)

* とともにディルタイの術語

かくて、グンドルフ及び教養市民の教養俗物的志向は合致し、グンドルフのゲーテ論は一時代のセンセーションをひき起しながら、実質のない力としてのゲーテ像、原因のない結果としてのゲーテ像、随伴現象のない一事件としてのゲーテ像、これらが歴史性のない Mythos ゲーテを構築することとなつた。したがって、こゝでは歴史、発展、進歩といったことがらは存在するすべもなかつた。つまり、この Mythos ゲーテは教養俗物展開の時代によつて組立てられ、美学的問題として唯美主義 (Ästhetizismus) の設定をうながしたのである。

この間の事情について、論理が形式に墮しているきらいがあるので、補足すればこうである。第一次大戦の勃発から戦後にかけて、スペンゲラー等により「西欧の没落」が喧伝されたが、こゝで終結しているのは「西欧」ではなくて、「市民社会的世界」なのである。実証主義文学研究の相対主義に対立させるために、生を絶対的に、美的に偶像化することにも、このことはあらわれている。当時の市民は自己に歴史的権利を与える自信を全く失つていたので空虚な空間に生命概念を求め、これを無理に構築したのだ。だが、この概念は一切の歴史的使命、すなわち歴史的な天才（ゲーテ）が、かつて市民社会的自由の最高の可能性として真のデーモンの要素を駆使せねばならなかつた市民社会的自由の天才的生活態度を超越しているものである。

最後に、グンドルフがこうした概念、美学的問題としてゲーテの“Urlebnis”（原体験）と「教養体験」（Bildungserlebnis）について触れておこう。この両者は文芸上の生の問題として設定された。グンドルフは、写生文学と模倣文学と対照的な文芸とは当面する世界から独立した独自の世界の表現とみた。だが、ゲーテの作品が当面する世界と常に対決しているのを見落せないで、グンドルフはゲーテの生の問題について、「原体験」の外に現実と関聯する「教養体験」をたて、この両者を区別した。この両体験のうちゲーテの原体験が完全な文芸をもたらしているのは既に周知のことであつたが、

* じつさい，“Urerlebnis”とはゲーテによりいわれている。

教養体験は文芸研究上の間隙であつた。グンドルフはこのことも分析しようとしたのである。ところが、ゲーテ自身はいついかなる時に原体験をするものか、教養体験をするものか知っていたであろうか。知っていたのはグンドルフだけである。つまり、既に指摘したとおり傾斜した時代の要請により構築されたにすぎない。グンドルフによれば両者は次のように区別される。「ゲーテは派生せる世界、教養世界における根源的人間であつた。かくして彼の作品は……この本源的実を教養世界の素材のうちに表現し、象徴化せんとする常に繰返された試みである。……私のいう原体験とは例えば宗教的、巨人的あるいは性愛的体験を意味する。——私のいうゲーテの教養体験とは、ドイツの前世界、シェイクスピア、古典的古代、イタリヤ、東洋等の彼の体験及びドイツの社会の彼の体験すらをも意味する。けれども彼の原体験と教養体験とは品種が異つていたばかりではなく、また程度、強度も異つていた。」（F. Gundolf : a. a. O. 39—40）

このグンドルフの理解の根底は、言葉をかえれば次のようになろう。原体験の場合には、詩人は詩的体験をたゞちに欲する状況にあり、教養体験の場合には、詩人は直覚を働かすのではなく、歴史的要因として活動する現実性を自由に取扱うといった単純な前提にある。教養体験のさいには当面する世界から独立した詩人独自の世界があいまいにされるともみられるわけだ。したがって経

験と、経験の対象となる素材とは、——現実の対象をどの程度につかひこなし
ているかにもとづいて判断される——芸術的統一とはならず、不純な二分
状態にあり、この混和関係は逆に現実解体の程度にしたがつて評価されるもの
といえよう。つまり、教養体験が原体験の圧迫を受ければ、それだけ文学の質
が純粹になると考えられている。このようにグンドルフの考察は歴史主義の因
果性、相対性への反撥に由っているにしろ、たえず現実性の排除へ向つたので
ある。このようにゲーテの本源的実態たる原体験を強調するのはよい。だが、
グンドルフの原体験は偽造されたものであり、ゲーテのそれと当然異なる。「グ
ンドルフにおけるこの区別の内容や方法論を仔細にみれば、本来偽造を許され
ない体験である『原体験』の判断の基準は、それが悟性的——理性的に把握さ
れうる社会的環境世界の関聯から脱却していること、いゝかえれば、その直接
的内容が社会的環境世界の諸規定を超越し、その哲学的内容が純粹に非合理主
義的（超合理的）になっていることなどに存することがわかるのである。」(G.
Lukács : a. a. O. S. 340.) と述べられるとおりである。したがって、グンド
ルフの意図は真のゲーテとして、デーモンの天才を提出しようとしているの
に、この天才は、ゲーテとは異り歴史的社会的作用及び民族的品位とは全く無
縁な存在となつて生れたのである。さらにグンドルフの教養体験の由るところ
を再見しても、こゝにはドイツ古典主義を流れるヒューマニスティックなイデー
とか、ゲーテ作品の一切の発展段階に具現されているドイツ社会の諸要因の関
聯とについて何等顧慮されてない。つまり、古典主義的歴史性、現実性に根ざ
すものでなく、「大きな脈が力を結集してこの細分化され、崩壊しゆく世界に
入つて行つたのだ」(W. Mahlholz : a. a. O) という傾向をおしすすめる現実
性にもとづいているのだ。したがって、グンドルフのたてたゲーテの教養体験
は現実性概念のすりかえによるものである。新しい教養俗物がゲーテに関心を
高めれば、それだけゲーテの現実性を顧慮させまいとするような意図のあらわ
れともみえるのである。

たしかに、グンドルフはじめ当時の学者が、個一全体といった生の中に、存
在のデーモンの背景を尊重し、本質的力としてのこの背景を学問的に顧慮しよ

うと発した。^{*}

* こゝでは少くともゲーテ的である。

だが、いつのまにかこの深い経験の力から燃上った新しい学問上のエトスとパトスの焰は学問の合理性を正しいとしながらも、これを超越し、真の歴史家を宗教的畏敬の念で充たしてしまうデーモンと敬神 (Gottseligkeit) といった神秘の分野にまで注目するようにしむけてしまう。さらに、非合理主義的人間の類型研究を促進するばかりでなく、あたかも歴史的合理主義のヴェールをつけたようにデーモンの背景をとりだすといったところまで墮してしまうのである。かゝる動向の帰因は市民社会的意識の崩壊にあることは論を俟たないのである。

以上、論考ははなはだしく未了である。グンドルフの由つたディルタイとの理論的対比も、最も肝心なゲーテのデーモン性自体、さらにこの要素の歴史的意味を文芸学がいかにかに受継いでいるかについても、ほとんど述べられなかつた。以上の二点については、実証主義と、その学問的性格づけの因となる Th. Vischer 理論とともに次の機会にゆずりたい。(1958. 10. 31.)